「男、突っ走る！」

第31回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内雅也（19）　名古屋芸術専門学校1年生

木内孝志（48）　雅也の父
木内真保（46）　雅也の母
木内健次郎（15）　雅也の弟

眞榮田浩平（19）　名古屋芸術専門学校1年生
福沢瑞枝（19）　名古屋芸術専門学校1年生
長井夏美（19）　名古屋芸術専門学校1年生
加藤直也（19）　名古屋芸術専門学校1年生
大久保正樹（23）　名古屋芸術専門学校1年生
植野雪奈（19）　名古屋芸術専門学校1年生
船倉篤志（19）　名古屋芸術専門学校1年生
奥村裕司（20）　名古屋芸術専門学校1年生
野添美南（20）　名古屋芸術専門学校1年生

渡部康太（39）　名古屋芸術専門学校教務課長
鈴島孝雄（52）　名古屋芸術専門学校入学事務局長
吉野茉由（25）　名古屋芸術専門学校入学事務局員
鈴本貴広（44）　名古屋芸術専門学校講師
藤堂香（54）　名古屋芸術専門学校講師
堀江朝日（35）　名古屋芸術専門学校講師
堀内泰正（58）　名古屋芸術専門学校講師
山浦重幸（58）　名古屋芸術専門学校講師

1

木内家・居間（朝）

孝志と健次郎が朝食を食べている――

真保が廊下から入ってくる。

真保「できたわよ」

と、一同振り返る――廊下からスーツ姿の雅也が入ってくる。

孝志「おう、できたか」

健次郎「何でスーツなの？」

雅也「今日は専門学校の入学式。学生たちはみんなスーツで出席なの」

真保「この日のために新調した甲斐があったわ」

孝志「そりゃ、これからスーツ着る機会も増えるだろうからな」

雅也「ネクタイの結び方が、どうも慣れなくて……高校のネクタイは、もう形になったやつをホックみたいにつけるだけだったからさ」

孝志「ちょっと貸してみろ」

と、雅也の目の前に来ると、慣れた手

つきでネクタイを締める。

孝志「よし、これで良いだろう」

雅也「すげえ」

孝志「普段は作業着だけど、スーツ着ること
だって俺にだってあるんだから」

雅也「またネクタイの締め方、練習しないと
な」

孝志「場数踏めば、何とかなるだろ」

苦笑している雅也。

N「二〇一四年四月、僕は専門学校に入学を
しました。知っている同級生が一人もいな
い中での専門学校生活の始まりは、不安な
ものがありました。そして入学式や新入生
歓迎会、オリエンテーションも無事に終わ
り、翌日から通常の授業が始まりました」

2　名古屋芸術専門学校・全景

3　同・４階・４０２教室

雅也、野添美南（20　）を始め、生徒

たちがそれぞれパソコン席に座っている――ホワイトボードで説明をしながら授業をしている講師・堀内泰正（58）。

堀内「我々編集の仕事をする世界にとって、文字校正を行ううえで、必ず使う言葉が、『文字を開く』ことと、『文字を閉じる』という言葉です。この意味、分かりますか？」

一同、首をかしげている。

堀内「『文字を開く』というのは、漢字をひらがなに直すことです。逆に、ひらがなを漢字に直すことを『文字を閉じる』と言います」

雅也、ルーズリーフにメモをする。

N「この方は、主に雑誌編集の授業を担当する堀内泰正先生。以前は編集プロダクションを経営しており、今は主に郷土史家として歴史の専門家もしていらっしゃるとか」

4

同・4階・廊下

雅也が部屋から出てくる――廊下に設置してあるプリンターの前に来ると、印刷された紙を持つ。

雅也「（紙を見て）あれ？　何だこれ？」

と、４０３教室から植野雪奈（19　）が出てくると、

雪奈「ごめんなさい、混ざっちゃいましたか。（と雅也を見て）あ」

雅也「あ、確か新入生歓迎会で……（とプリントを渡す）」

雪奈「ありがとう。私、雑貨＆アクセサリー専攻の植野雪奈」

雅也「シナリオライター専攻の木内雅也です。『うっちー』って呼んでください」

雪奈「よろしくね、うっちー」

と、微笑むと、教室に入っていく――

雅也、プリントの内容を見ながら、４０２教室に戻っていく。

5　同・5階・502教室

講師・堀江朝日（35　）が授業をしている――聞いている雅也、美南たち。

堀江「小説の視点で多いのは、三人称神視点というものです。彼が、あるいは誰々が、と登場人物それぞれの視点で描く書き方です。また、読者層の若いライトノベル等で多いのは、俺や私といった視点で描く一人称視点という描き方です。これから出す課題では、この視点をしっかり意識して書いてみると良いでしょう」

雅也たち、それぞれノートにメモをしていく。

N「この方は、小説制作の授業を担当している堀江朝日先生。文学賞を受賞して小説本をいくつも出版している現役の小説家さんです。シナリオの書き方しか知らない自分にとって、この小執筆の授業が実は苦手でもありました。そして一日一日、学校での暮らしは過ぎていきました」

6

同・４階・４０２教室

藤堂がスライドを見せながら授業をしている――それぞれの席で聞いている雅也たち。

藤堂「キャッチコピーというのは、短い中でどれだけ伝えたいことを入れるのかが大事です。そのためには、まずターゲットやシチュエーションをできるだけ多く考えることが大事です。今から十分間、時間を図りますので、できるだけ多くの登場人物やシチュエーションを考えてみてください。じゃあ、用意スタート」

と、パソコンに文字を打っていく雅也たち。

N「体験入学の時にも授業をしてくださった藤堂香先生。本業がコピーライターなので、担当授業はコピーライティングを中心に、文章表現基礎とアイディアテクニックを担当しています。脚本で長台詞を書いてきた

自分にとって、このキャッチコピーの授業も実に苦手な授業でもありました」

7　同・6階・廊下

雅也がやってくる――廊下のベンチに座っている眞榮田浩平（19　）。

浩平「おつかれ」

雅也「（一瞬驚いて）おつかれ」

浩平「今から英会話？」

雅也「うん……もしかして、一緒？」

浩平「おお」

雅也「そっか」

と、浩平の隣に座ると、鞄からパンを取り出し、食べ始める。

浩平「確か、シナリオライター専攻だったよね？」

雅也「うん。そっちは？」

浩平「俺はＣＧ＆映像クリエイター専攻」

雅也「ふーん」

浩平「あ、俺は眞榮田浩平。よろしく」

雅也「俺は木内雅也。こちらこそ、よろしく」
握手を交わす雅也と浩平――と、エレベーターが開き、長井夏美（19　）、福沢瑞枝（19　）、加藤直也（19　）、大久保正樹（23　）が、話しながら出てくる。
浩平「（夏美たちに）お疲れ」
一同「お疲れ」
夏美「ん？　この子は？」
浩平「シナリオライター専攻の木内君。（と雅也に）みんな、俺と同じＣＧ＆映像クリエイター専攻なの」
雅也「そうなんだ。シナリオライター専攻の木内雅也です」
夏美「長井夏美です」
瑞枝「福沢瑞枝、よろしく」
直也「俺は加藤直也」
正樹「大久保正樹、マーボーって呼んで」
雅也「よろしく」
と、雪奈が階段を上ってくる。

雪奈「あれ、うっちーも今から英会話？」
雅也「うん。ゆきちゃんも？」
雪奈「そうだよ」
雅也、鞄からプリントを取り出すと、
雅也「あ、ほんとだ。木曜六時間目の英会話は、小説専攻、シナリオ専攻、アニメーション専攻、映像専攻、雑貨専攻の合同授業って書いてある」
瑞枝「結構な大所帯になりそうね」
直也「英会話、できるかなぁ」
夏美「大丈夫よ、教科書通りにやっとけば」
正樹「俺は大学出てからこの学校入ったけど、当時から英語は苦手だったなぁ」
雪奈「まあ、何とかなるでしょ」
浩平「そろそろ時間だから、教室入るか」
雅也「うん、そうだね」
と、それぞれ中へ入っていく。

8　木内家・居間（夜）
真保が夕飯の支度をしている――と、

真保の携帯電話にメールが来る。メールを見る真保。

雅也の声「今、学校終わった。２２時２５分、駅に着きます」

返信をする真保。

真保の声「了解」

9　駅・ホーム

夏美と瑞枝が階段を下りてくる。

夏美「あ」

瑞枝「え？」

と、前を見ると、雅也が立ったまま本を読んでいるのが見える――夏美と瑞枝、雅也の隣に来ると、

夏美・瑞枝「木内君」

雅也、振り向く。

雅也「あれ。長井さんに福沢さん」

夏美「木内君も、こっち方向なんだ」

雅也「うん、途中で乗り換えだけどね」

夏美「私も途中で乗り換え、みずちゃんは終

点の一個前で降りるの」
雅也「じゃあ、みんな方向は一緒なんだ」
夏美「実はね、私たち、高校も同じなの」
雅也「そうなの？」
瑞枝「学科が違ったから、当時は話したことなかったんだけど、当時からなっちゃんは話題の人だったの」
雅也「話題の人って？」
瑞枝「私は商業科で、なっちゃんは家政科だったんだけど、当時家政科にすごい綺麗な子がいるって」
雅也「なるほどね。確かに、オリエンテーションの時に長井さんを見たとき、モデルさんみたいな人だなって思ったこと思い出した」
夏美「そうだったの？」
雅也「うん。そんな人と帰り道が一緒だなんて、光栄だわ」
瑞枝「私も。高校の同級生に、なっちゃんと同じ学校で専攻も一緒って話したら、ズル

いって羨ましがられたの」
雅也「そりゃそうだよ」
と、電車が入ってくる。
雅也「空いてると良いね」
瑞枝「うん」
夏美「特急は、いつでも混んでるからね。特にこの夜の時間帯は」
雅也「そうだよねぇ」
と、談笑しながら電車に乗り込んでいく。

10　最寄駅・表

真保が乗用車に乗って待っている――
改札口から雅也が出てくると、助手席に乗り込む。
雅也「ただいま」
真保「おかえり」

11　道を走る乗用車

12　その車の中

真保が運転し、助手席に雅也。

真保「どう、学校は慣れた？」

雅也「まだ二日しか経ってないけど、何とかいろんな子と話せるようになった」

真保「そう」

雅也「小説の授業とキャッチコピーの授業は、難しいけどね」

真保「シナリオライター専攻なのに、そんな授業もやるの？」

雅也「文章全般の事をやるんじゃないかな。それに、まだシナリオの授業もないし」

真保「え、シナリオの授業ないの？」

雅也「先生に聞いたら、シナリオの授業は二年生からで、一年生はもっと根本の基礎的なことやるんだって」

真保「そうなんだ」

雅也「一年生の間に基礎をやっとかないとね。それに脚本を整理するための文章力だって必要になるから、そういう面ではいろいろ

勉強になるかも」

真保「まあ、あんたが楽しんでるなら良いけどさ」

雅也「うん。書くためには、日々基礎をやらないとね」

真保「ふーん」

13　名古屋芸術専門学校・表（朝）

吉田、教務課長・渡部康太（39　）、事務局長・鈴島孝雄（52　）が立っており、通学してくる学生たちに挨拶をしている。

吉田「おはようございます」

鈴木「おはようございます」

渡部「おはよう」

と、鞄から学生証を取り出して、首にぶら下げながら雅也が登校してくる。

渡部「おはよう、木内君」

雅也「渡部先生、おはようございます」

渡部「学校は慣れたか？」

雅也「まだ一週間も経ってませんからね。でも学校の雰囲気が楽しいので、すぐに慣れると思います」

と、笑いながら入っていく。

14　同・５階・５０２教室

美南がパソコンで原稿を書いている―

―雅也が入ってくる。

雅也「おはようございます」

美南「おはよう、木内君」

雅也「あれ、野添さん早いじゃん」

美南「私、地元近いから」

雅也「野添さん、名古屋だっけ？」

美南「うん、港区。栄から地下鉄で二十分」

雅也「良いなぁ。俺なんて、名鉄と地下鉄乗り継いで、どう頑張っても一時間半はかかるから」

美南「よく通えるね」

雅也「まあ、自分がその道を進みたいからね。そりゃ朝も早いし、満員電車も大変だけど、

それでもここに通ってプロを目指せるんだったら、そんなの苦じゃないから」

美南「そっか」

と、生徒たちがぞろぞろ入ってくる。

生徒たち「おはようございます」

雅也「おはようございます」

と、講師・山浦重幸（58）が入ってくる。

山浦「おはようございます」

雅也たち「おはようございます」

山浦、ホワイトボードに『ＭＹ　ＮＥＷＳ』と書き始める。

雅也「あの、山浦先生。その『ＭＹ　ＮＥＷＳ』って何ですか？」

山浦「授業が始まったら詳しく説明をしますが、自分が見て感じたことを、５Ｗ１Ｈを意識して記事のように書いてもらいます」

雅也「記事……ですか？　日記みたいなものですか？」

山浦「まあ、簡単に言うとそういうことです。

ですがあくまでも記事なので、初めて見た人でもちゃんとその内容や、出てくる登場人物が分かるように描写を意識して書いてください。ただダラダラと説明を書くだけではなく、文章を生業にしたいと思っている以上は描写をしてください。それが『MY　NEWS』です」

雅也「分かりました……」

難しい顔で、パソコンを立ち上げる雅也。

N「広告事務所でプランナーとライターをしている山浦重幸先生が担当する記事ライティング授業。この頃、僕は説明と描写の使い分けに苦労をしていました。それもそのはず。脚本は説明と台詞で設計されている一方、記事や小説は台詞より描写や表現を試されるからです。台詞しか書いてこなかった僕にとって、山浦先生が毎週課題で出す『MY　NEWS』には苦戦をしていました」

15　同・屋上

雅也がドアを開けて出てくる――自販機でジュースを買っていると、喫煙スペースで煙草を吸っている奥村裕司（20）を見つける。

雅也「奥村君？」

裕司「あれ、木内君じゃん」

雅也「新入生歓迎会以来だね」

裕司「専攻違うと、なかなか会うこともないもんね。確か、文章系だったよね。小説専攻じゃなくて……」

雅也「シナリオライター専攻」

裕司「それ」

雅也「まあ、小説専攻もシナリオ専攻も授業は全部一緒だから、大して変わらないけどね。奥村君って、ゲームの専攻だったよね？」

裕司「ああ。ゲームプランナー専攻」

雅也「何やるの？」

裕司「簡単に言うと、ゲームの企画をする仕事かな」
雅也「プロデューサーってこと？」
裕司「それに近いかな」
雅也「へえ、すごいね、奥村君の専攻は」
裕司「そういえばさ」
雅也「うん」
裕司「奥村君って呼ぶの、やめない？」
雅也「何か呼んでほしいニックネームある？」
裕司「プランナーの中では、おっくーって言われてる」
雅也「じゃあ、おっくー。俺はね、高校の時にうっちーって言われてたから、うっちーって呼んで」
裕司「分かったよ、うっちー」
雅也「よろしく、おっくー」
と、船倉篤志（19　）がドアを開けると、
篤志「おっくー、そろそろ授業始まるよ」
裕司「分かった、すぐ行く」

雅也「あの子は？」
裕司「俺と同じゲームプランナー専攻のあつぽんって言うんだ。今度紹介するよ」
雅也「ありがとう」
裕司「そろそろ行かなきゃ」
雅也「あ、俺も授業だ」

16　同・５０２教室

雅也、美南、雪奈たち生徒がパソコンの前に座っている――と、始業チャイムが鳴り、講師・鈴本貴広（44　）が入ってくる。

鈴本「授業始めます。起立、お願いします」
一同「お願いします（と着席する）」
Ｎ「グラフィックデザイナーとして活躍するこの鈴本貴広先生の存在が、僕にとって学生生活を充実させるきっかけとなることに、まだ僕自身、気づいてはいませんでした」

つづく